

をはじめ、五百機たつることをおしへて人の膺を温め、百の種々をわかちて市たつることを教へて、交易の道開けぬ。かく功德の廣く大に、天が下萬代までに及ぶものあらんや。報じても報じがたきは、神農の恩徳なりかし。わが家ゆたかなるをもて、かくおもひ立つとはあらず。久しくせちにおもひとりて、常につひえを除き、たからを賣りなどして、あしすこしばかりを貯へおけるを、彼の用度にあてんとおもひ侍るなり。しかはあれども、我ころの十が一にもあらず。いでや世にわがころさし助けて、此いさをしを終へしめむとおもふ人、などかなくてやあらむ。さる程ならば、ゆくゆくおほやけにけいして祠を建て、もろくの人詣で来て、たうとみおがみ、且病ある人いりの誠をつくさざらしめむ。若し神明不測の感應に依て、事なるにいたらば、すこしき國恩を報じ、聊神徳を謝するにあらずやと、やつがれつねく聞きてなみだをたれ、いとたうとみおもんじて、終にそのことばをしるすものしかなり。頃は寶永三のとし、睦月初の五日のことになんありける。

芦原長民子

一、原夫太古之民者、茄艸木之實、啖禽獸之肉。未知耕稼之道。炎帝神農氏出、教之播種而農事始興焉。且嘗百藥救人疾病。而醫道肇於斯矣。自是以來、四荒八埏、無不被粒食藥餌之惠者也。然則神農不唯君乎中華而已。九夷八狄、七戎六蠻、凡食穀服藥者、皆得而君焉。應猶猶知報本、劔執刀圭者、可不思所以反始乎哉。洛陽醫師雨森良意之家、藏唐工所雕神農之像、舊矣。常恐閭閻相逼、或罹池魚災、故欲索善地於郊外。安鑿像乎祠宇。使醫流農家徧得拜焉。附之以書厘藥苑、而救窮民之病。盡請諸朝、而後行之。且有請薦神儒醫之詩歌。集爲一軸、以爲祭祀歌頌之願。一日來請余作詩。語其摶造之志、如自序所記也。余嘉其志之大且仁。乃先往家拜像、鬼工如生。儼爾可懼焉。脅息而進。蹶蹶而退。不知何代降乎本朝也。心醉經日。不堪感戴。自忘謏劣、叨獻鄙章。且奉銖金、以充楮錢。乃謂主人曰。吾子之志也大矣。吾子之力也恐不足矣。然天下之廣、豈得無有同其志而助其力者耶。嘗見臺大石者、一人之力不足、以動其百分。百人戮力、則能移之。可輸之山。是知百人之力、則一人之聚也。其宜莫以一人而易焉。余力雖不足、以當

一人。執小處進衆人之前。欲以助其邪許之聲耳。
寶永丙戌純陽之月伊藤素安謹序。

稻梁初種藝。藥艸也權輿。功繼羲皇術。術先軒后費。餘靈
覃海島。遺像歷居諸。辱在醫流末。問源欲祭魚。

一、雨森良意世善醫。家藏炎帝像。傳謂中國人所雕也。曩者與二三同侶往拜。聖容。宛然神威可畏。眞非良工心苦。安得如此精妙哉。退賦古調一篇贈之。且祝速大之志云。

鴻荒不可測。茫茫無津涯。於赫烈山氏。火德承庖犧。夙感神龍瑞。降長姜水涓。人身而牛首。聖德合兩儀。言始教稼穡。不使黎民飢。藉鞭鞭艸木。甘苦咸辨知。本業與賤役。永辟萬世基。德澤翻宇宙。仁恩被華夷。吾友黃鶴子。好古復善醫。家世藏遺像。奉祀久相食。盟漱時拜謁。感神自媿々。願賴國家力。改作血食祠。

丙戌之春三月初五日 滄洲柳三省 謹稿
拜炎帝像

神龍忽起烈山中。遺像儼然祀事崇。牛首人身瞻異相。艸衣石座仰淳風。始嘗百藥醫經說。會聚群財民用通。萬古帝恩開粒食。五絃樂曲入年豐。

巽軒木宗本拜

一、自鳴鐘排律十韻

甕氏爲鐘日。軒皇制漏成。授時欽曆象。齊政在瓊衡。圓蓋天形小。方輿地體平。宸宮瞻紫極。仙闕望蒼瀛。辰宿分經緯。陰陽自運行。磨旋玄蠟轉。隙過白駒征。曆柱西崑壯。魁杓北斗橫。輪重華月滿。繩直絳河明。燥炭懸權重。浮灰動管輕。霄間金桴倚。雲表玉杯擎。隕石銅丸下。奔雷鐵軸轟。山崩遙應響。霜降暗飛聲。龍夜盆中躍。雞晨枕底鳴。析傳通遠郭。鼓答徹高城。紅線量長短。黃鐘定濁清。却如聽廣樂。不是夢瑤京。

右白石作 元隆己卯年

一、阿蘭陀人御暇之時被仰波

覺

一、阿蘭陀事は、御代々日本商賣可仕の旨被仰付候。毎年長崎令着岸候。從此以前被仰出候與南蠻と、きりしたん宗門通用彌仕るべからず。若し致入魂の由、いづれの國より相聞といふとも、日本渡海可爲御停止候間、彼宗門より日本へ通用一切仕るべからず。勿論宗門の者船にのせ來まじき事。